

一見さんお断り

那覇の街を歩いていて不思議な店に出会いました。「悦ちゃん」というお店。おでん屋さんです。国際通りから2分ほど外れた場所にあります。店の数は少し減りますが、ライブハウスがあったり、観光客相手の沖縄料理店があったりします。悦ちゃんは観光客を相手にしていない地元のお店であることを感じさせる小さな店です。以前に行ったことがある方が、案内してくださいました。



中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



お店の入り口は扉1枚。店の前に緑色の看板が出ています。何となく入りにくい雰囲気を感じる店構え。なかにお客さんがいるようなので思い切って扉に手を掛けました。ところが、その扉が開きません。「お休みですかね?」「でもお客さんがいるみたいだから、営業はしているのでは」などと話し合ったうえで、もう一度扉に手を掛けました。その時に、店主がなかから扉を開けてくださり、お店に入ることができました。

店に入ると、カウンターと座敷の店。決して美しい店ではありません(失礼御免)。お店の方は筆者と同世代の高齢の女性。「ごめんなさいね。変なお客さんが入ってきて、店の雰囲気を壊されたくないの、いつも鍵を掛けたまま営業しているの。女ひとりだし」「泥酔した客が入ってくると、他のお客さんの良い雰囲気が壊されるから」と弁解され、

「お客さん達は変な人じゃなさそうだから鍵を開けたの」。扉



▲おでん屋「悦ちゃん」

に手を掛けた筆者達を品定めしたうえで、店に入れてくださったようです。その後は、沖縄の知り合いの方などのことをお話しし、店主に安心していただきました。沖縄のおでんは美味でした。豚足のおでんはちょっと癖になりそうな味です。

大相撲や花街にはお茶屋さんが存在します。その役割は、持続的な関係のもとで安心してお客さんに遊んでいただける仕組み。花街のお茶屋さんの女将さんは客の好みを理解し、遊びの空間をプロデュースする。大相撲のお茶屋さんは、特定の顧客と関係をもち、確実にチケットを販売する。どちらも一見の客には閉鎖的にみえる役割です。一見の客が歴史や伝統も知らないままに、ビジネスの仕組みをかき乱すことを防止する仕組みとも言えます。長期的な関係のなかで仕事を大事に育てていく仕組みを、那覇の街でみせていただきました。

【訂正とお詫び】

前回紹介した岩井田保健師のお名前を間違えていました。正しくは岩井田せつ子さんです。お詫びして訂正します。

(MBO実践支援センター代表)